

さんしゃ Zapping

Vol.28 No.1 (通巻169号)

2013年5月

<産社学会 ニュースレター>

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186

E-mail: s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp

<http://www.ritsumei.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

〔目 次〕

< 新任紹介 >

着任のご挨拶と自己紹介	盧 載玉	p.2
着任のご挨拶	岡本 尚子	p.4
着任のご挨拶	玉置 えみ	p.6
着任のご挨拶	趙 没名	p.8
はじめまして！	羽田 千恵子	p.10
My Japanese experience, in five points	Monika STEFFEN	p.12

< 新任紹介 >

着任のご挨拶と紹介

盧 載玉



2013年4月1日より産業社会学部に所属し、外国語（朝鮮語）を担当させていただくことになりました盧載玉と申します。

私は、1984年4月に来日し、2002年に学位論文を提出するまで同志社大学に在籍していました。同志社大学の博士後期課程に在籍する傍ら、1997年から朝鮮語の講師として大学で教えることになり、現在に至っています。

これまで16年間、いろいろな大学で朝鮮語を教えました。その中でも立命館大学との縁は深く、一番長く立命館大学で朝鮮語教育に携わって、約12年になります。

その間、本当にいろいろな学生と

出会いました。また朝鮮語という言葉を通じて、日本と韓国という二つの国・文化の間に立つ講師という仕事の意味や意義を改めて認識させられることもしばしばありました。そうした経験から授業では、単に朝鮮語を教えるというだけではなく、言葉を覚えることで、少しでも韓国のことが理解でき、好きになってもらいたいという気持ちを持って学生に接するように心がけていました。私自身も立命館大学の学生や先生方からたくさんのことを学び、様々な体験を積み重ねながら、教師として成長してこれたと思います。

外国語教育は、何よりも生きた言葉を学び使いこなせるようになる、いわゆるコミュニケーション能力を育てることが目的であるといえましょう。授業では、学生が目標言語である朝鮮語でいかに自己表現できるかを指導上の重要な問題と捉えて、学生の話す活動を中心とした授業を目指しています。また学生が興味を持って学習に取り組んでこそ学習の効果があると考え、楽しみながら勉強できる授業を目指しています。そういう試みの一環として授業では、韓国の歴史から、文化、社会事情、生活習慣、若者の流行な

ど、様々なテーマを取り上げて異文化としての韓国を紹介するようにしています。そうすることによって単なる外国語の習得にとどまらず、朝鮮語を学ぶ楽しさが、韓国についてのさらなる関心やより深い理解へとつながることを期待しています。

近年、日本においては韓国に対する関心が高まっています。2002年のワールドカップサッカー日韓共同開催がそのきっかけとなったと言われますが、いずれにしろ、2000年代ごろから「近くて遠い国」といわれた日本と韓国が隣国としての相手に対して新しいまなざしを向けるようになったのは事実です。それから「冬ソナ」ブームが起き、社会現象にもなりました。もうすぐ下火になるだろうという予測に反して、現在も多くの若い人たちが韓国の歌を聴いたり、ドラマを見たり、韓国に旅行に行ったり、「韓流ブーム」は続いています。このような変化は日本だけではありません。韓国でも、日本文化を愛する若者たちがますます増えてきて、「NIPPON FEEL」という新しいことばが使われています。実際に、町の中にたこ焼きやお好み焼きの店が並んでいて、ハンゲルに交じって日本語の看板が何の違和感なくかかっている、そして美味しそうにたこ焼きをほおばる若者たちを見かけると、ここは本当に韓国かと思うくらい日本の日常をそのまま体験することができます。

これらは私が来日した約30年前と比べると信じられない情景です。

というのも私が日本に来た時は、キムチが食べたくても、韓国食材専門の店にまで行かなければキムチを買うことができませんでした。その時と比べると今やキムチはどこにでもあり、普通に食べられるものとなりました。また韓国では日本のアニメや漫画の中から日本の物というのが分かるようなものは全部書き直されていたからです。こうした両国の社会変化をみる限り、今後の日韓関係は、一般の人々の暮らしの中からの草の根的な交流を通してますます良くなると言えましょう。もちろん両国の間には歴史問題など、解決が急がれる過去が残っています。しかし互いにより良く知りたいという気持ちを持ち、歩み寄ることができればいずれか最善の知恵が生まれるのではないのでしょうか。そのために私は学生のみなさんに、朝鮮語を学び、韓国という異文化を体験し理解する力を育ててほしいと思います。そこで育んだ力はきっとみなさんが将来、世界に羽ばたく上で求められる国際感覚にもつながることでしょう。これから立命館大学の朝鮮語教育に携わる者として、みなさんと共に学びつつ、新しい日韓関係のための一助になるべく頑張りたいと思います。



着任のご挨拶

オカモト ナオコ
岡本 尚子



本年度4月より、子ども社会専攻で勤務させていただくことになりました岡本尚子と申します。「算数」「算数科教育法」などを担当させていただきます。大阪大学大学院人間科学研究科で学位を取得した後、学術振興会特別研究員PD(京都大学大学院医学研究科)を経て、こちらに着任いたしました。

私の中心的な研究テーマは、大学院生の頃より一貫して「神経科学(脳科学)的手法を用いた算数・数学教育学研究」でして、算数や数学の問題に取り組んでいるときの脳活動を計測し、その思考特徴を生理学的な視点から検討しています。脳活動を計測する装置の多くが医療機器であり、データ分析も医学・生理学の手法が必要であるという事

情から、前任校の所属は医学研究科でしたが、あくまでも、足場は算数・数学教育にあります。教育的な問題から出発し、脳活動計測を一つのアプローチと捉えて研究を進めています。

日本ではまだまだ馴染みがうすい教育学と神経科学に関する研究領域ですが、国際的には広まりを見せており、International Mind Brain and Education Societyという学会の設立や、Trends in Neuroscience and Educationという論文誌の刊行をはじめとして、“教育と脳”に関連する複数の学会や論文誌が新設されています。また、現在、教育学と神経科学の学際的研究領域は「Educational Neuroscience(教育神経科学)」という名前と呼ばれるようになっており、ロンドン大学にはCenter for Educational Neuroscienceが設立されているほどです。未成熟な研究領域ですが、今後の発展が期待される研究領域でもあります。

さて、私がこれまで研究してきた内容は、医学研究で多く用いられるような簡単な暗算や数唱ではなく、筆算の虫食い算(筆算途中のいくつかの数字を にして、その にあてはまる数字を答えさせる問題)などの比較的難しく、実験中に方略の獲

得が必要となる問題を実験課題に設定し、その解決過程の脳活動を計測することです。研究の結果から、方略が未獲得な状態では脳活動は活発化するけれども、方略獲得の見通しが立つと徐々に脳活動は弱まり、方略を獲得できると脳活動はほとんど活発化しないということが分かりました。つまり、学習の始めのうちは試行錯誤をして、色々と考えを巡らせるため、脳活動は活発化しますが、もう分かったこと、難なくできることではその必要はなく、脳活動は活発化しないといえます。これは何かの非熟達者と熟達者との関係にもあてはまります。少し桁数の多い暗算を、一般の大学生と珠算有段者に行ってもらくと、一般の大学生の脳活動は活発化するものの、暗算に慣れた珠算有段者の脳活動はほとんど活発化しないことがデータに表れます。ですので、学習において重要なことは、単に「脳活動が活発化していること」よりも、「分からない（試行錯誤）；脳活動の活発化」から「分かる；脳活動の抑制」への変化ではないかと考えています。

現在は、学習者だけではなく、教師側の脳活動も計測することで、教師の思考過程を可視化しようと実験を実施しています。実験の結果から、教師が学習者と距離を置いて客観的に学習者を観察しているのか、もしくは、より学習者に感情移入をしながら情動的に観察しているのが、脳活動のデータとして異なる

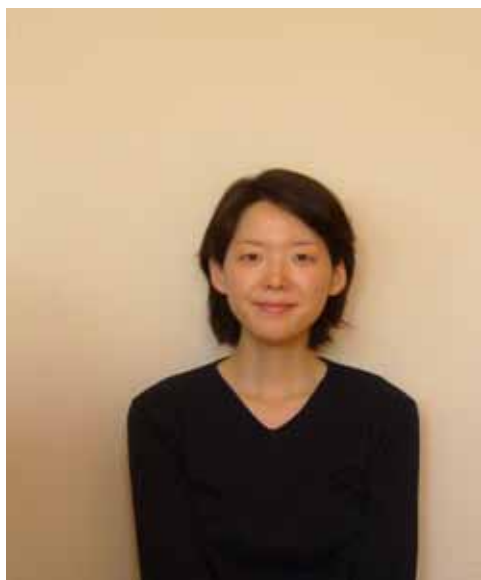
ことが分かってきました。こうしたことは、教師自身の無意識的な部分も少なくないため、脳活動データが暗黙知を表出させるものとなる可能性を示唆しているのではないかと考えています。今後は、ベテラン教師と新人教師の比較を行い、ベテラン教師の技を明らかにしていきたいと考えています。

皆様、ご指導・ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。



着任のご挨拶

タマキ
玉置 えみ



本年4月から、産業社会学部にて助教としてお世話になっております、玉置えみと申します。「国際セミナー」や「国際社会入門」、「プロジェクト・スタディ」などを担当させていただいています。まだ着任して1ヶ月もたっておりませんが、すでに、多くの先生方、事務室の方々にご親切にいただき、心より感謝しております。まだ分からないことが多々ありますが、今後ともご指導ご鞭撻いただけましたら、幸いに存じます。

さて、自己紹介として、いままでの研究関心やこれから取り組んでみたい課題を書いてみたいと思います。私の主な研究分野は、社会学、特に社会人口学や比較社会学です。

これまで先進諸国の多くが抱える人口学的イシューである、「国際移動」や「少子化」について、主に統計的手法を用いて研究して参りました。

国際移動に関しては、移民の母国とのつながりと移住先での適応の関係、また彼らの健康状態について興味を持っています。今までは、アメリカの移民データを使い、母国への紐帯が強い移民ほどメンタルヘルスが良く、また、ホスト社会への社会・経済的適応度が高い移民ほど、国を超えた母国との関わりがあること、などを論文としてまとめてきました。今年度からは、静岡県浜松市におけるブラジル人を対象とした健康調査をもとに、彼らの母国とのつながりと健康との関連を検証する予定です。とくに日系ブラジル人を取り巻く、日本独自のコンテクストなども勉強したいと考えております。

少子化の分野では、結婚に焦点をあて、結婚と仕事、そして健康の関係を見てきました。具体的には、非婚者よりも既婚者のほうが健康状態が良好であるとする「マリッジ・ベネフィット仮説」を、日本のデータで検証し、その男女差についてまとめました。結婚が経済的安定や精神的サポート、そして健康的な生活習

慣を促すとする、この仮説は、日本人男性にはうまく当てはまらないこと、そして仕事を持つ既婚女性にもあまりあてはまらないことが分かりました。今後は、アメリカの日系人データを使い、国際移動がマリッジ・ベネフィット仮説の男女差におよぼす影響を検討したいと思っています。

少子化の別の側面では、加齢にともなう女性の生物学的再生産機能の老化（^{にんようりょく}妊孕力の低下）について、将来的に調査を行いたいと考えています。日本の少子化は、20 - 30歳代女性における晩婚化および出産の先送りに加え、加齢にともなう再生産機能の老化からも影響を受けていると推測されます。少子化が大きな社会問題として認知されている一方で、その背後に存在する生物学的要因に関する研究はほとんど実施されていません。隣接する分野との共同研究を通じて、働き方やストレス、睡眠、喫煙などが再生産機能の老化に及ぼす影響を検証したいと望んでいます。

以上、簡単ではございますが、自己紹介にかえさせていただければと思います。研究、教育ともに、まだまだ勉強不足ですが、今後、立命館大学で成長することができればと思います。どうぞよろしく願い申し上げます。

Zapping 原稿募集

研究会・学会報告の他、留学記、課外活動報告などあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろんな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめてのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字～2,000字程度でお書きください。

着任のご挨拶

チョウ メイミン
趙 没名



2013年3月8日は、私にとって記念すべき日でした。それは、その日が国際女性の日だからではなく、私が立命館大学の特別契約教員として採用された日だからです。

特別契約教員とはいえ、立命館大学産業社会学部の一教員として自分の母校に奉仕できることは私が常に願っていたことです。なぜなら、ここで、私はかつて8年間の大学院院生の研究生生活を送り、3年間の非常勤講師を経験し、社会学の論文を読み書き、社会学の調査技術を学び、教学の基礎的技法を身につけたのはもちろんのこと、何より重要なのは、ここで、私は初めて人権、共生、平等、発達保障、福祉、それと日

本国憲法の真の意味を知ったからです。そしてここで、私は真からわが子のもつ重度の障害を受容し、障害をもつ人々の存在の意味を理解するようになり、さらにここで、私は社会の温もりを体で感じたからです。

かつて中国からの留学生であった私は、徒然草や方丈記を通じて、中世隠遁者文学を愛し、吉田兼好や鴨長明に魅せられて、まったく現実の社会に目を向けようともしませんでした。そして、春は五島列島や沖縄、秋は三陸海岸や伊勢神宮など、日本各地を歩き回り、民俗調査にも没頭していました。悠々自適で順風満帆の人生でした。しかし、1993年に待望していた長男が重度の障害をもって生まれた時に、それまでの私の人生に衝撃が走りました。そして2年後の1995年に次男も生まれ、長男と同じ重度の障害をもっていると医者に告げられた瞬間に、まるで巨大地震が発生したように、私の身も心も激しく揺れ動き、その余震もその後何年も続いていました。

これは生命の偶然でしょうか、それとも神の仕業でしょうか。いいえ、これは、母子三人、遺伝子に組み込まれている運命的出会

いでした。しかし、それにしても、なぜこの私？なぜこの幼子？なぜ二人とも？なぜこの孤立無援の島で？...。毎日毎日無数の悲嘆、毎日毎日無数の消沈、毎日毎日無数の絶望の連鎖でした。しかしそのたびに目をわが子に向けますと、幼子たちは、嚙下ができなくても無邪気に微笑んでいるではありませんか、永患不治の病であっても医者たちが懸命に緩和治療をしているではありませんか、屋外へ出られなくても近隣たちが温かく介護に来てくれるではありませんか。その時に私は決めました。重い障害をもっている人間として生きていけるこの社会について勉強してみよう、かじってみよう。

1998年に立命館大学社会学研究科に入って間もなく、私はデュルケームとマックス・ウエーバー、パーソンズなどの社会学者と出会いその理論を知りました。そして真田是と糸賀一雄、高木憲次とも巡り会い、三元構造論と福祉の思想、肢体不自由児の療育論にも深い感銘を受けました。

そうです。たとえわずか1パーセントのチャンスしかなくても、たとえどんなに極微の世界にいても、この子らを世の光に、この子らを療育に、この子らが人間らしく自分らしく発達することに私は何かができるはずですし、何かをしなければならぬのです。

あれから私はもう悲嘆しませ

ん。消沈しません。絶望もしません。ただひたすらに前を向いて前進するのみです。

このように、これまでの私に学問の体系と福祉の思想の基盤を作るのに有意な環境を提供してくれた立命館大学の教職員や同窓の皆さんに深く感謝しています。そして、願わくは、これからも一教員としてたとえささやかな灯火であっても、それを必要としている誰かのために照らすことができたら幸いであると考えています。



はじめまして！

羽田 千恵子



みなさん、はじめまして！

私は、これまで滋賀県立養護学校の教師として、養護学校が義務制となった1979年から34年間、障害児教育（特別支援教育）に取り組んできました。そのほとんどの期間、重症心身障害児と言われる子ども達の教育に携わってきましたが、障害の重い子ども達の内面発達の把握とその豊かな発達を促す授業のありかたを、実践を通して研究することを追求してきました。

ご存じのかたも多いと思いますが、滋賀には戦後すぐに、戦災孤児たちと障害児がともに育ち合う日本のあり方をめざして、糸賀一雄らが、児童福祉施設「近江学園」を創設しました。そして、孤児たちが卒園し障害の重度化、成人化がすすむ

中、一麦寮、落ち穂寮、信楽青年寮、もみじ・あざみ寮と次々に施設をつくっていきます。しかし、医療をも必要とする非常に障害の重い子ども達への取り組みを創立当初より大切にしてきた 不断の研究 を研究部が中心となってすすめるなかで、実践的事実をもとに障害の重い子ども達も通常の子ども達と同じ発達の道筋にあり、人間として豊かに発達することを見いだし、重症心身障害児施設びわこ学園設置に至ります。

私は、第2びわこ学園にある、滋賀県立八幡養護学校野洲校舎に初めて赴任しました。今から思えば、運命的なものを感じます。1968年に制作された『夜明け前の子ども達』の映画にも出てきた過年齢の方達も校舎に学びに来られていました。

野洲校舎で4年、本校に戻って5年、三雲養護学校10年、草津養護学校12年、野洲養護学校（八幡養護学校廃校と同時開校）2年、と多くの重症心身障害児の実践を通し、障害により、自分で思うように周りの世界に働きかけることが出来ず、言葉を発しないために、実際以上に幼い内面発達ととらえられ、幼い働きかけ、教育内容になっていないだろうか、という問題意識を一貫して

持ってきました。

実際に、話し言葉はなくても言語理解を示したり、魅力的な授業には始まる前から準備を期待して見つめ、学習活動において僅かでも自分の力で物に働きかけることができた時に、きちんと意味づけて褒めると、2時間目は自分からしようとする子ども達がありました。また人形劇や劇あそびの学習において、話しの次の場面に期待して、次に表れるものの方向に視線を向ける、友だちの活動をじっと見て「やりたい」と表すなどイメージや言語理解の力、つまり・自我を発揮する子ども達がありました。でもこの子ども達は、そういう力を仮定して実践に取り組む中でようやく本来の力を出してきます。

こうした子どもの内面発達をより科学的に捉えるために、滋賀大学大学院に内地留学をする機会を得て田中杉恵先生に指導を、またその後龍谷大学大学院後期博士課程において田中昌人先生に指導を仰いできました。

もちろん、障害児学校の教師として、担任集団で話し合い、実践の中で共感的に理解を深め合い、授業をさらに練り合う、という担任集団としての実践的検証とその共通理解のための研究の場を大切にしてきました。「明日の実践が楽しみ」になるような研究のあり方を集団的に探ってくる事が出来たかな、と思っています。また、それを全体に推し進める学校としての研究の推

進力を高めることも大切になってきます。研究部の分掌部長としてかなりエネルギーは要りましたが…。これまでの子ども達の輝く姿や教職員集団との実践的共感と、実践を通じた教育課程づくり、そして学校づくりについてなどいっぱい宝の山に感謝し、すこしでも学生たちの特別支援教育についての学びに役に立ちたいと願っています。

お知らせ

産業社会学会評議委員会
(総会)の予定
2013年6月4日(火)

My Japanese experience, in five points

Monika STEFFEN



First of all, I want to thank Ritsumeikan University, the College of Social Sciences and its Dean, Professor Ikutoshi Aruga for inviting me. My special and personal thanks go to Professor Ryozo Matsuda, who initiated the project, organize the academic program and worked really hard to

resolve the numerous practical problems, from filling in many Japanese administrative documents to guiding me, an analphabet, through Japanese academia. His kindness and valuable advice have allowed me to enjoy an excellent working environment, a stimulating academic program, and a rewarding teaching class. I also want to thank Professor Atsushi Fukasawa and Professor Nobuhiko Maeda, as well as Professor Noriko Yasue from the College of Policy Science, for their welcome and the interest they have shown in my research fields. I am further indebted to my teaching assistant, Takashi Hiraishi, for his efficiency and motivation, and to the administrative staff of the College, particularly Mr. Kenji Koga for the excellent organization, unmatched in French university administration.

Second, I would like to present myself to those College members I have not yet had the pleasure to meet or met only briefly. My academic background is in sociology and political science. I specialize in the sociology of public policy, particularly comparative health policy, working on the French medical profession, the French and German health systems, Aids policies in Europe, medical accidents, the Europeanization of health policies, etc. In the future, I would like to

look into health policy in the so-called emerging economies. Why do they not adopt universal systems of medical cover, as did the “old” industrialized countries? Health is a good lens through which societies can be observed.

Some readers may know about the particularity of the French academic system, which is divided between research and teaching, each with its own employers, budgets, positions and evaluation modes. While it is regularly emphasized that the work of an academic should include both teaching and research, the institutional reality makes this difficult. I am a Senior Research Fellow at the CNRS (the French “National Center for Scientific Research”) and affiliated to the Institute of Political Studies at Grenoble University, where I head a Master program in health policy and management. The latter was set up in collaboration with the University Hospital, and trains young students together with experienced professionals. This program thus bridges the two separate academic worlds in France as well as the gap between the worlds of university and the economy.

This example suggests that Grenoble is an innovative place. It is famous in social history for having started off the French Revolution and for major innovations in social policy (family allowances were first paid in Grenoble). Today, it is known for its high-tech industries and its heavy scientific equipment, renowned worldwide in physics.

Third, I would like to share my experience, which is easy to summarize: I am very happy here, and most impressed by the excellence of Ritsumeikan University. There are rooms to meet and discuss with colleagues; students are polite, disciplined and interested; the staff is helpful and efficient. Its private status probably provides Ritsumeikan University with greater autonomy for academic policy, strategic development and better management than the traditional French public service can allow for. I observe from my easiest point of view, which are the Ritsumeikan Libraries: they are incredibly rich, offer a huge foreign documentation collection, not only including all the English-written books in my specific field, scarcely available in France, but also... the reports of the French

"Cour des Comptes" (Court of Accounts), including the latest one on social security spending! I have rarely had the chance to use such wealthy and well organized libraries, with long opening hours, and truly helpful staff.

Fourth, this attests to the openness of Japanese thought, in contrast with what most Europeans, including intellectuals, may still believe. I am discovering a contemporary Japanese history comparable in many ways to that of Western Europe (the labor movement, the long way to democracy, etc.), and similar current challenges: changes in employment patterns, family structures, gender issues, and demographic patterns, against the backdrop of a shrinking welfare state. While the policy problems to solve in Japan and Western Europe today share a similar architecture, policy responses however cannot escape the national context and domestic politics.

Fifth, we should therefore more systematically compare the social issues and policies of our respective countries. This is the scientific agenda of my visit to Ritsumeikan. Professor Ryozo Matsuda and I are writing a first joint paper comparing the French and Japanese healthcare systems, reforms and challenges. It will be presented at the forthcoming "International Conference on Public Policy" in Grenoble, after an initial seminar discussion at the college here. We hope this work will initiate further collaboration between our respective universities.

One final puzzle. I am fully enjoying Kyoto's exceptional cultural heritage, the beauty of the temples and gardens in blossom, but this was expected. My real surprise has been this: statistics and direct observation lead me to conclude that life in Japan is more difficult for most people than in France and Europe. Yet the average inhabitant of Kyoto I meet is extremely kind, very attentive, without complaints and always ready to help. There must be a secret for this (Zen culture? the educational system? good public governance?), which Europeans would do well to learn from.